



# SOSO フレンズ



大堀相馬焼  
この地から、100年をつなげる

大熊町と関係人口のいまとこれから

SOSOフレンズノート  
「福島には、楽しいから来てるんです」



レポート!

15年前の規模で開催!  
山津見神社の例大祭



まずはお互い、友達から  
—関係人口のはじめかた—

「田尾さん、なんで福島に来たんですか？」

ふくしま未来創造アカデミーレポート漫画

YOUは何しにSOSOに?

特集!



小高のイマを語り合う

## SOSOフレンズ座談会



※福島12市町村とは…福島第一原子力発電所の事故により、避難指示等の対象となった田村市、南相馬市、川俣町、広野町、楡葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村、飯館村を指します。

# はじめまして。 福島12市町村\*で活動する関係人口と 地域の交流にフォーカスした冊子 「SoSoフレンズ」と申します。



近年「関係人口」といった言葉は広く使われるようになりました。

けれど、私たちが日々の暮らしを営むなかで、地域に関わる隣の誰かを、

「関係人口」と呼ぶことはあるでしょうか。きっと、呼んだことがないと思うのです。だからこの冊子では、関係人口のことを親しみを込めて

「SoSoフレンズ」と呼ぶことから始めます。

私たちが伝えたいのは、地域のありかたにおける正解でも、

明日から使えるTipsでもありません。SoSoフレンズのみなさんが経験してきた、福島12市町村との関わりの「途中」や「きっかけ」を、飾らずそのまま届けたい。

この冊子を通して

「そういえば、あの人はあれが得意だったかも」

「そうだ、これはこの人に声を掛けてみようかな」

「そうそう、SoSoフレンズたちとやってみようかがある」

——そんな想いがみなさんの心に芽生えたら、いつか具体的なつながりへと発展するかもしれません。私たちは、そうした想いの先に広がる未来を描きながら、この冊子を作りました。

この冊子では、関係人口に関係あることも、一見関係なさそうなことも取り上げます。

もしかしたら、いま読んでくださっているあなたにとって、関係ないことが関係あるかもしれない。関係あることもないことも、いろいろな話の枝葉がつながり、伸びていく。

そんなイメージで、「SoSoフレンズ」との関係性を、読者のみなさんと一緒に作っていきたいと思っています。

追記…本冊子は、できれば全てSoSoフレンズと表記したいのですが、便宜・テーマ上、

「関係人口」「地域住民」というワードが多く登場します…。あらかじめご了承ください。

特集!

06

小高のイマを語りあう  
SOSOフレンズ座談会

Column

12

そもそも関係人口ってなんですか？

Interview

16

「関係人口」提唱者のひとり、高橋博之さんに聞く  
まずはお互い、友達から — 関係人口のはじめかた —

Interview

20

大堀相馬焼  
この地から、次の100年をつなげる

Report

32

15年前の規模で開催！  
山津見神社の例大祭

Interview

40

「田尾さん、なんで福島に来たんですか？」

Interview

54

SOSOフレンズノート  
「福島には、楽しいから来てるんです」

Interview

64

— 幾橋さんに聞く、  
大熊町と関係人口のいまとこれから

02

SOSOフレンズとは

28

最近福島にきた人へ聞いてみた「福島一年生」

漫画!

44

ふくしま未来創造アカデミーレポート漫画  
「まったく知らないふくしまの今とちょっと未来をのぞいてみた」

52

福島12市町村おすすめスポット

60

YOUは何しにSOSOに？

72

SOSOグルメコーナー

75

SOSOな本屋さんへ聞く「今の福島を知れる本」

# 小高のイマを語りあう

# 地元出身者 × 移住者 × 関係人口 SOSOレンズ座談会

取材場所はココ!

## 双葉屋旅館について

小高駅前の旅館。4代目女将・小林友子さんがきりもりする。訪れる人の“ただいま”を受け止める温かさが魅力だ。地域の人や訪問者が繋がる場としても注目されている。2024年、宿の隣にはアンテナショップ「KIRA」もオープン。  
住所: 〒979-2121 福島県南相馬市小高区東町1-40





# こんにちは! から始めよう 僕たち私たちのSOSOフレンズ

**志賀** 僕は横浜から毎月のように浜通り周辺を訪れていて、駅を降りた瞬間に「帰ってきたな」と感じます。小高は駅からのメインストーリーがバーンと開けて、朝と夕方までまた違う表情を見せてくれる。小高ス

**西山** 私は2018年に小高に移住してきたんですけど、最初に感じたのは同調圧力がないこと。他の地域だと「みんなでこうしましょう」みたいな空気を感じることがあるんですけど、小高はそれぞれが自分の信じることを自由にやってる。でも足は引つ張らない空気がある。

**小林** 小高は震災以前より、外から来る人を受け入れる風土のある場所なんです。私の場合、旅館をやっているんで、自然と「どういう人かな」って興味を持つことから始まります。

——小高に来る関係人口はどんな印象ですか？

**志賀** 昔は地元を早く出たくて仕方なかったんです。いわゆる都会に憧れる田舎っ子で。高校卒業後は地元の郡山で働き始め、その後、北海道、埼玉、今は神奈川と、いろんな場所

**西山** 「こんにちは」って挨拶から始まって、徐々に関係が深まっていきますよね。

**小林** みんな話したいのよ。息子や孫が近くにいないから、若い人と話せるだけで嬉しいんだと思う。

トア（地元のスーパー）でアイスを食べていたら、地元の方が「どこから来たの?」って話しかけてくれたりして。程よい距離感なんですよね。



## 小林友子さん

福島県南相馬市小高区出身。双葉屋旅館4代目女将。菜種油の搾油と販売の(株)希来の杜の代表、小高商工会女性部の部長など、多彩な活動で地域再生を支える要。



## 西山里佳さん

福島県双葉郡富岡町出身。小高へ移住し marutt 株式会社設立。クリエイティブスペース「粒粒」を運営し、デザイン事業やイベントの企画など多彩な地域プロジェクトを展開する。



## 志賀諒太さん

福島県郡山市出身。横浜在住。関係人口として小高へ通い、イベントや地域活動を手伝いながら関係を育む。小高でよく泊まる場所は双葉屋旅館や小高パイオニアヴィレッジなど。

SOSO POINT

有給を使い、横浜から電車で通う志賀さん。公的な補助金制度などは使わず、「1回の食費旅費交通費は3万円ぐらい」だそう。好きだから自費でも行く、そんな“SOSOフレンズマインド”を感じます。

に住んで働いてきました。各地で暮らして、地域の人と話したり文化に触れるうちに、地域と関わることで面白いなって気づいたんです。

**西山** 私も実家を出たくて東京に行ったクチなので、すごく分かります。

**志賀** そんな中で、勤め先の研修に参加した際に「ふくしま未来創造アカデミー」という講座を知って。それがきっかけで西山さんとのご縁もあり「おだかつながる市」のお手伝いなど、小高へ行くようになりました。で、気づいたら居心地がよくなっていましたね。

**西山** 最初から何か目的を持って来なくても、来てみれば目的が見つかるっていう感じですよ。

**志賀** 来ると気になるとが出てきて、それがま

た次に小高へ行く理由になっていく。

**小林** 自分のペースで、自分の楽しみ方で関わってくれればいいのよ。

**志賀** お手伝いをやらされている感覚は全くなくて。非日常に来てるっていうより、これも含めての日常っていうか。普通の暮らしの延長線上に、小高との関わりがある感じです。同居人には「全然家に居ない！」ってたまに怒られてます（笑）

**小林** 若い人だけじゃなくて、リタイアした50〜60代の方が自分の資金で移住して、新しい事業を始めるケースも増えているんです。それもすごく嬉しいことですね。失敗してもいいし、また戻ってきてもいい。

——地域住民として、関係人口と関わる時に心がける「じよ」はありますか？

**小林** 外から来てくれた人の足を引

**小林** 山登りでも、知識がいっぱいの人より、「まあいっか」ってゆるく登る人のほうが最後まで残るでしょ。失敗してもいいから、自分らしく関わってくれればいい。

——関係人口として外から関わる時に気をつける「じよ」はありますか？

**志賀** むやみに震災文脈で話さないようにしています。

**小林** そうね。地元の人同士だって、やっとなんか話せるようになってきた。ここで、普通に、しあわせに暮らしていることを話したいよね。

**西山** うんうん。ずっと変わらない景色があって、それを守ってる人たちがいて、そんな小高が好きだなあ。

**志賀** もう一つは、主役は地元の人

**小林** お互いに無理しない。無理しないけど、できることをやる。それが小高の関係人口のいいところかな。そもそもね、地元の人って言うても、最初はみんな外から来た人だったでしょ。相馬藩だったぞうなんだから。

**西山** 地元も外も、程よい距離感を保ちながら、お互いを尊重する関係がいいのかもしれないね。

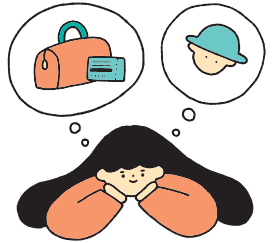




**Q** この本では関係人口をなぜSOSOフレンズと呼ぶの？

**A** 友達のような身近で近い存在として感じてもらうためです

関係人口という言葉は、地域との関わり方を説明するために生まれた言葉です。ただ、「関係人口」と聞くと、硬い表現に見えて少し距離を感じてしまうこともあるかもしれません。そこでこの本では、もっと身近な存在として感じてもらいたいという思いから、関係人口を「フレンズ」と呼び、12市町村の関係人口を「SOSOフレンズ」と呼ぶことにしました。



**Q** 関係人口になるきっかけって？

**A** きっかけは、実はとてもさまざまなんです

旅行や仕事、ボランティア活動、会社の研修や学校のフィールドワークなど、様々なきっかけで何度か訪れるうちに自然と関係人口になる人も少なくありません。地域の皆さんとの会話の中に「そうそう！」と共感が増えている頃には、いつのまにかに関係人口という存在になっているかも…！それが私たちの考える「SOSOフレンズ」です。



**Q** 関係人口にはどうやったらなれる？

**A** まずは気軽に地域を訪れてみるところから

SNSで気になる地域を調べたりして、「行ってみよう」とか、「もっと知りたい」と思ったら、気軽に地域を訪ねてみてください。関係人口に特別な資格や準備などは必要ありません。何度か訪れるうちに、「また行きたい場所」や「また会いたい人」が頭に浮かぶようになれば、すっかり関係人口になっています。まずは自分の好きなことを起点に、お気に入りの地域を見つけることが、SOSOフレンズへの入り口です。

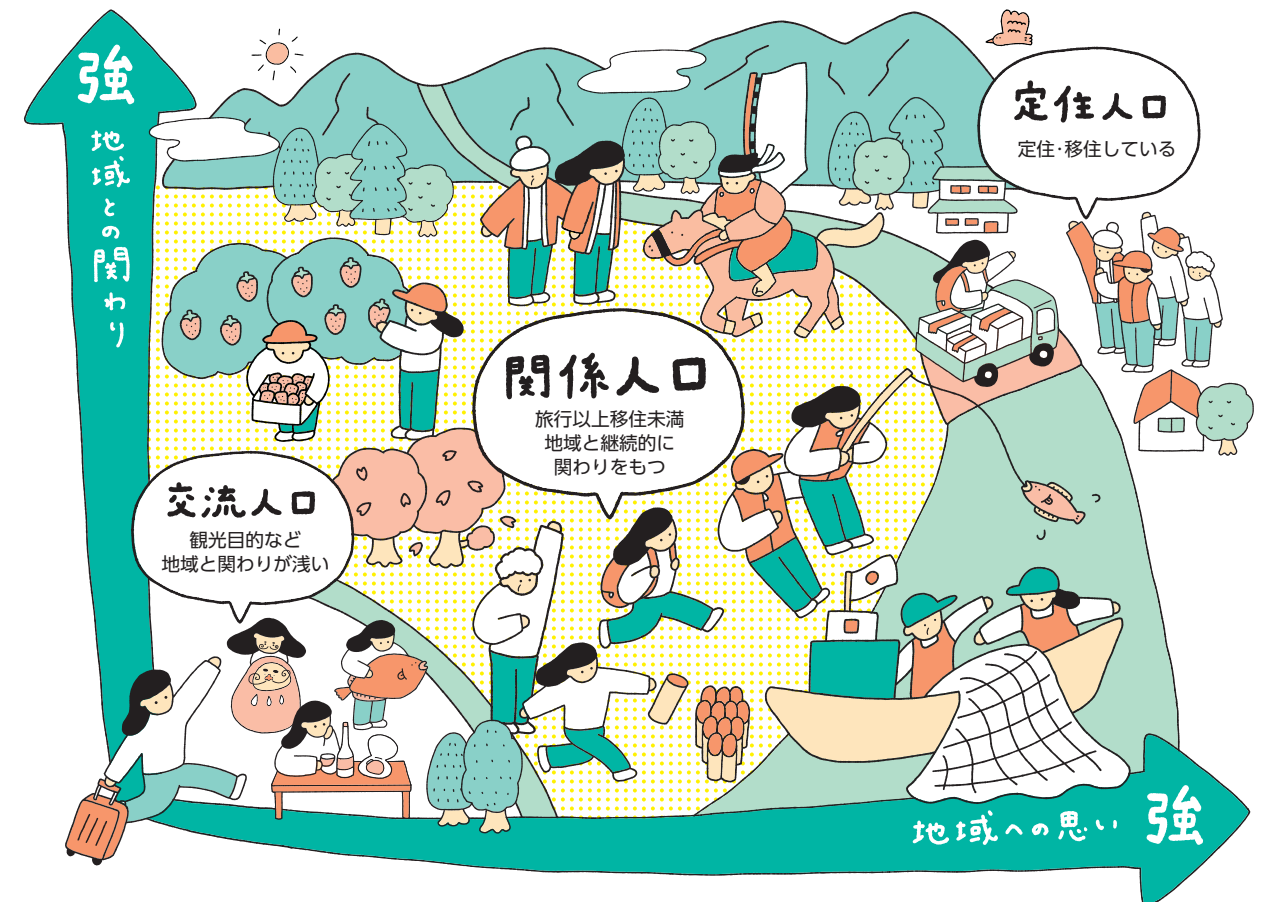
関係人口ってよく聞くけれど…

# そもそも関係人口ってなんですか？

関係人口とは、旅行以上移住未満、地域となんらかの関わりを持ってゆるやかに継続してつながる人たちのことです

目的をもって何度も同じ地域を訪れる人や、複数の地域を行き来する多拠点居住の人も関係人口です。地域に関わり続けることで、地域づくりの新しい担い手や新たな視点で地域に変化を生み出す存在となっています。反対に関係人口にとっては、地域の人の温かな受け入れによって、日常では得られない経験や気づきを得る機会にもなっています。

illust / Yuka Murakami



福島12市町村の関係人口づくりに取り組む

# 福島相双復興推進機構の活動のご紹介

私たちは、福島12市町村\*を中心に、様々な共創プロジェクトや各種イベント・プログラムを通じて、人と地域が自然につながるきっかけをつくっています。また、地域の魅力を発信し、SOSOフレンズが無理なく、楽しく、何度も足を運びたいくなるような機会を広げています。SOSOフレンズがまちづくりに参加することで、まちの魅力を高めるという好循環が生まれることを目指し、継続して様々な取り組みを行っています。

※福島12市町村とは…福島第一原子力発電所の事故により、避難指示等の対象となった田村市、南相馬市、川俣町、広野町、楡葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村、飯館村を指します。

## 地域と関係人口をゆるやかにつなぐわたしたちの取り組み



ふくしま未来創造アカデミー

### ふくしま未来創造アカデミー

主に首都圏在住者を中心に、SOSOフレンズになりたい方を対象とした、福島12市町村との関わり方を考える連続講座



### F12FLY (フライ) プロジェクト

主に首都圏の大学生等を対象に、12市町村のキーパーソンの活動や課題の解決に、出番と役割をもって協創する機会を提供しているプログラム



### ソーシャルコラボレーションプロジェクト

都市部のプロボノ人材が、地域課題に取り組む団体と共鳴し協働するプロジェクト



### 福島ベンチャー留学

大学生が長期インターンシップを通じて、福島12市町村の事業者の経営課題をプロジェクト化し課題解決にチャレンジする事業



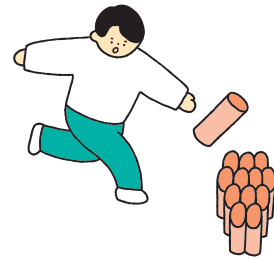
福島12市町村とゆるやかにつながり、何度も会いたくなる場所や人を見つけてみませんか。関係人口として、そしてSOSOフレンズとして関わってみたいみなさまのご参加をお待ちしています。最新情報はこちら ▶ <https://www.fsrt.jp/ex5>



## Q 関係人口と地域で良い関係を作るには？

A 肩に力をいれず  
友達になる気持ちで楽しく関わること

関係人口と地域がうまく付き合っていくために、SOSOフレンズ同士が無理をしないことです。肩に力を入れず、まずは「一緒に楽しいことをやってみよう」くらいの軽やかな気持ちで関わるのが大切です。関係人口は、その地域が好きで、気になっているから来ている人たち。その気持ちを受け入れ少し余白を持って付き合うぐらいが、良い関係につながっていきます。



## Q 福島の関係人口たちはどんなことをやってるの？

A 手伝ったり遊んだり  
マイペースに地域と関わっています

この冊子に登場する志賀さんは、週末になると福島を訪れています。地域のお手伝いをしたり、顔なじみの人とおしゃべりをしたりしながら、少しずつ地域の暮らしに関わっています。特別なことをしているというより、通う中で自然に関係が育っています。



福島はただ楽しいから来ていると話している笹野さんは、大学時代のボランティアサークルがきっかけで地域とつながりました。今ではモルックをしに来たり、イベントがあればふらっと手伝いに来たりと、無理のない関わり方を続けています。

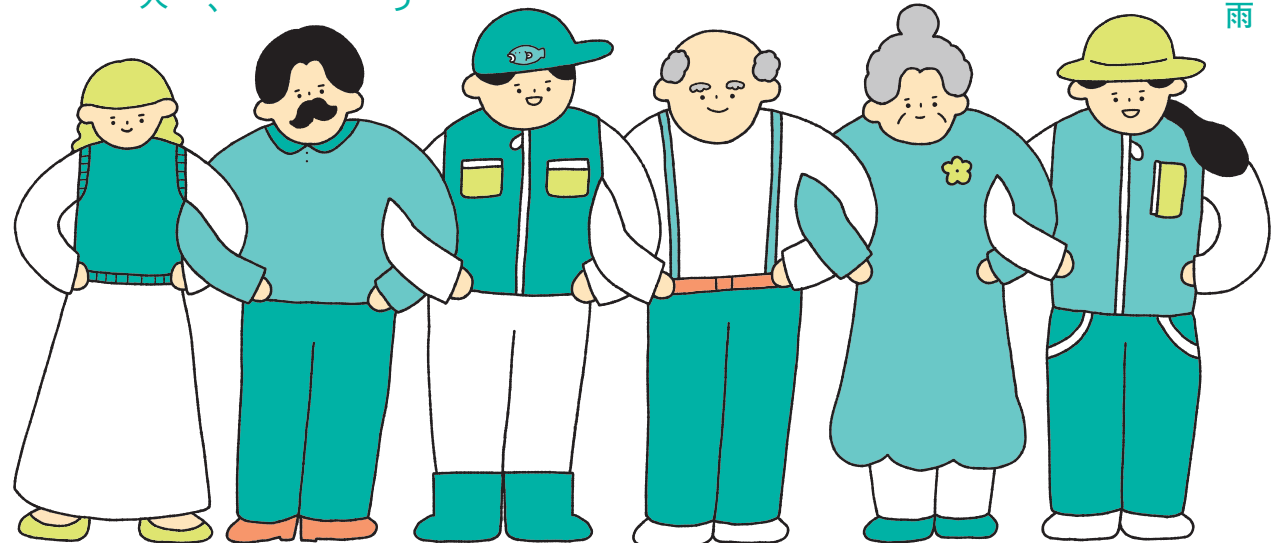
関係人口提唱者の  
おひとり  
高橋博之さんに聞く

## 福島につづけ!



# まずはお互い、友達から 関係人口のはじめかた

「まずは友達からで、いいんです」株式会社雨風太陽の代表、高橋博之さんは、穏やかに語りはじめる。移住でも観光でもない、地域と多様な関わりを持つ人々を「関係人口」として提唱してきた有識者のひとりだ。「都市と地方をかきまぜる」というビジョンのもと、遠ざかってしまった地方の生産者と都市の消費者が直接つながる仕組みづくりを目指し、食べもの付き情報誌「東北食べる通信」というメディアを自ら立ち上げた。福島県内ではその志に共感した2つの「食べる通信」が発行されたように、全国の地域プレイヤーに火をつけたのが高橋さんである。「人口減少に悩む地方にとって、関係人口は新しい可能性を開いてくれる」この言葉を高橋さんは2013年頃から訴え続けている。行政や自治体関係者の間ではこの10年ですっかり浸透した関係人口という言葉だが、「地方創生2・0基本構想」が閣議決定されたことにより、2034年度までの10年間でさらに追い風が吹くと言われている。都市と地方が互いに支え合い、双方が豊かになる未来を描くために、関係人口について高橋さんに話を伺った。



「ここが好き」という心を見逃さない

移住者と関係人口の本質は「オーナーシップ」にあると、高橋さんは語る。オーナーシップとは、誰かに背負わされるものではなく自分起点で主体的に取り組む姿勢だ。「これだけ選択の自由が叫ばれる世の中で、未だに意志を持って選べないのは、親と生まれ

る場所だけです。原子力災害の影響を受けた方々の大変な状況は除きますが、移住者と関係人口は、様々なプロセスを経た結果、自ら選んできていますよね」と高橋さんは語る。ボランティアとして、助けが必要な地域に使命感を持って出入りしていた人が、用事の有無に関わらず、ゆるやかな関係性を持つようになるイメージだ。ボランティアで通った地域でお祭りがあから手伝おう、顔見知りができたら会いに行こう、ただ黙々と駅舎に季節の飾りをして帰る有志もいる。どこでも良いわけではなく「ここが好きだ」という想いが、人を突き動かしている。

移住者だけじゃ、だめですか?

地方都市の人口減少を食い止めるべく、移住者をどれだけ増やすかに焦点を当てている自治体も多い。実際、全国の約2750の自治体のうち、9割は移住をゴールに掲げている。そのうち、関係人口創出に本腰を入れている

自治体は1割にも満たない。なぜ今、移住者ではなく、関係人口なのだろうか。「日本全体で人口が減っている今、奪い合いをしてもダメなんです」と高橋さんは強調する。地方は、さまざまな領域で担い手が不足している。都市か地方かの二択しかない社会は、どうしても都市に人口が偏ってしまう。「これからは地域で人材をシェアする時代。移住しなくても地域に貢献できる人は、実はたくさんいます」と高橋さんは発想の転換が必要と話す。

関係人口を移住の入口にする自治体は多いという一方で、「移住を前提に関わるのはちょっと重い。今どき、結婚を前提にお付き合いしてくださいなんて、重いじゃないですか」と高橋さんは続ける。まずは関わってみて、移住を検討してもらおう、という流れはいい仕組みに思えるが、蓋をあけてみると実はうまくいってないことがあると言っ。まずは関わることで自体を楽しみ、その結果、お互い気が合えば結婚することもあるだろう。地域も関係人口も、



まずは友達から。最初は一緒に楽しむだけでOK、そんな軽快な心意気がヒントになりそうだ。

### 本音は「いい人だったら来てほしい」

ほとんどの地域の人がそう口を揃えるだろう。「関係人口は、会社の新卒採用に似ていますよね」と高橋さんは語る。将来、活躍する人だけを採用するのは、とても難しい。一方でなかなか活躍できない人がいるのも事実。こんな時、どう対応するのが良いのだろうか。「正直な話、活躍できない人を避ける方法はない」だが、「いい人がより深く関わってくれるヒントはある」と言う。それは、少しでも貢献してくれたら、「ありがとう」を伝えることだ。関係人口の中には「何か貢献しても、地域の人から認められにくい」と感じている人もいる。結局のところ、「大切なのは人と人との関係」と高橋さんは話す。感謝の気持ちを伝えるだけで

いい。それが外から来た人の大きな力になり、継続して地域に関わりたくなるきっかけとなる。

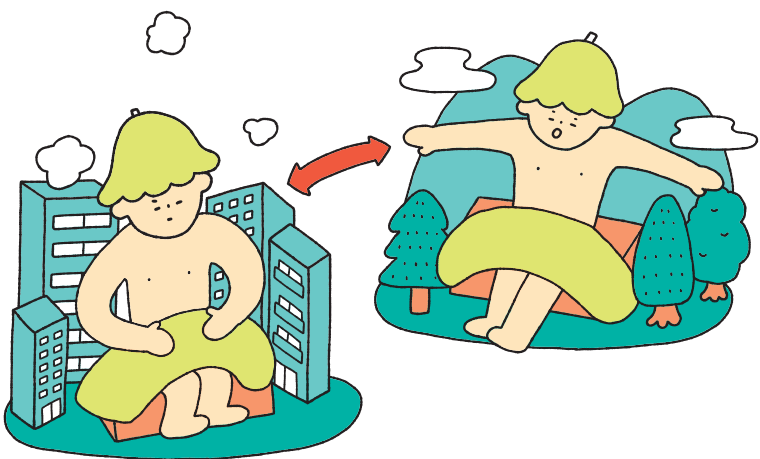
### 関係人口との成功例

関係人口の関わり方は多様だ。売り上げを顕著に伸ばしているという福島県磐梯町の「道の駅ばんだい」の事例を高橋さんは挙げる。売上データ、外気温、風速を把握するシステムが導入され、今ではどの売り場に何を置けばどれくらい売れるか、だいたい予想がつくようになり、スタッフのモチベーションも上がっているという。責任者としてこの仕組みを導入したのは、埼玉県との二地域居住者だ。4年以上副業として地域に関わりながら、道の駅の売上は伸び、働く人たちの収入も上がった。前述の「移住しないと貢献できないのか？」という問いに対しては「決してそんなことはないですよ」ときっぱり言い切る高橋さん。こうして見ると、福島は関係人口の力と、地域の課

題がマッチングしている先進地域なのだ。

### 真逆の世界で共に「つながる」

高橋さんは、都市と地方の関係を「サウナ」に例える。90度以上の空間で汗だくになって、次はキンキンに冷えた水風呂に入る。正反対の世界を往復して、とこのう。サウナ用語で、心身

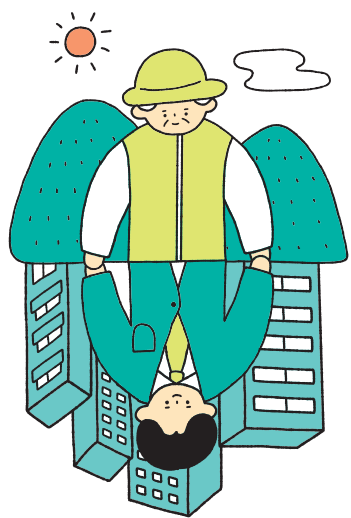


ともにリラックスして、新しい視界が開けるようなイメージだ。「都市と地方は真逆の世界。そこを往来することで、心がととのっていくんです」と高橋さん。関係人口は「その地域が好きだから」と前置きをしたうえで、「最終的には出て行くかもしれません。だからこそ、厳しいことも言えるんです。地域に暮らす仲間うちでは、言いづらいこともあるだろう。都市も地域も、真逆の世界からしか学べないことは、たくさんある。正反対の存在に触れることで、自分を客観視する。そして自分たちの良いところ、ダメなところを正しく把握できる」。視界が開ければ、豊かな発想が生まれそうだ。

の時代の「社会の弱点」をあぶり出す。だから、災害がなくてもどんどん人口が減少している地域は、「慢性的な災害状態にあります」と高橋さんは警鐘を鳴らす。「食べ物、エネルギー、レジャー、そもそも都市の競争力の源泉は地方にあるのだから、本来は都市の課題として取り組むべきです。しかし、『べき論』では人は動きません」。さらに「都市も地方も、なかなか幸せを感じにくい世の中になっていますから」と高橋さんは続ける。都市では生きる実感を失い、地方は祭りを続けられず楽しみが減っている。関係人口は、地方の課題を解決する一方的なベクトルではなく、都市と地方、双方で暮らす

### 地方も都市もおたがい幸せな世の中に

こうした往来は、「事前復興」にもつながる。事前復興とは、災害が起きる前から、地域と外部の人々が関係性を築いておく概念だ。自然災害は、そ



#### 高橋博之さん

1974年、岩手県花巻市生まれ。岩手県議会議員を経て、2013年にNPO法人東北開墾を立ち上げ、「東北食べる通信」を創刊。2015年、株式会社雨風太陽(旧ポケットマルシェ)を設立し、代表取締役に就任。内閣官房「新しい地方経済・生活環境創生本部」有識者会議メンバー。都市と地方をつなぐ関係人口の創出に取り組む。



高橋博之 著『関係人口 都市と地方を同時並行で生きる』(光文社新書)  
関係人口という概念を世に広め、新時代の地方創生論を展開した一冊。

人たちが互いに幸せに生きるための存在なのだ。まさに、心身ともに「ととのう」未来、その最前線に福島はいる。

# この地から、 次の100年をつなげる

大堀相馬焼

大堀相馬焼



大堀相馬焼は、300年以上の歴史を誇る東北有数の伝統工芸だ。江戸時代の隆盛期には100軒以上の窯元があったと伝わり、時代とともに作風を変えながら、人々に愛されてきた。双葉郡浪江町の大堀地区。この「焼き物の里」で新しい挑戦が始まっている。

陶吉郎窯の近藤字さんは、2024年6月、避難先のいわき市から約13年ぶりにこの地に工房を再建した。大堀に戻った理由、それは「伝統はその土地でやってこそ意味がある」という信念だった。「産地を作らない」と、100年単位での継承は難しい。近藤さんが目指すのは、自らの代で10人の窯元を育て、自立させることだ。全国から担い手を募り、技術を教える。伝統を未来に繋ぐ、その最前線がここにある。

取材場所はココ!

## 大堀相馬焼 陶吉郎窯

〒979-1544 福島県双葉郡浪江町大堀字後畑98-1  
10:00~18:00(火曜定休)

制作を行う工房とショップを構える。現代の暮らしに寄り添う器や酒器が並ぶ。不定期で作品展やイベントも開催され、大堀相馬焼の多様な魅力に触れられる空間だ。





### 近藤学さん

国指定伝統的工芸品・大堀相馬焼窯元「陶吉郎窯」9代目。1954年福島県双葉郡浪江町大堀生まれ。日本最大規模の美術公募展・日展にて2020年、2024年と2度の特選受賞。日本現代工芸美術展審査員。伝統の継承と革新に挑み続ける。

## 窯元が集う産地をつくる希望

「江戸時代から今まで、それぞれの時代に新しい作風が生まれ、変化してきた」伝統とは、時代とともに進化し続けるものだ。だが今、日本の伝統工芸は大きな岐路に立っている。後継者不足や産地の縮小。多くの産地が同じ課題に直面している。大堀相馬焼も例外ではない。かつて20軒以上あった窯元が、震災による原発事故で半数近くが廃業した。成形を分業していた職人は1人を除いて辞めてしまい、その1人も大堀には戻っていない。2018年、近藤さんは避難先のいわき市で工房を構えた。震災前の大堀と同規模の工房だ。日々、全力で作陶に打ち込んだが、違和感は拭えなかった。「毎日精一杯働いても、何かが違う。大堀でなければダメだと思った」それは郷愁ではない。伝統は、その土地の歴史と

共にある。技術と粘土があれば、どこでも作れるかもしれない。けれど土地を離れた伝統に、未来はあるのか。近藤さんはこの問いに向き合い続けた。2024年6月、近藤さんは浪江町に帰還。大堀に工房を再建し、窯に火を入れた。「先人たちが苦労を重ね、つなげてくれた。その思いを、自分の代で途絶えさせていいのか」近藤さんが目指すのは、産地としての再生だ。「伝統を継承するには、生業として成り立たなければならぬ。そして、一軒や二軒では、長い時代をまたいで繋いでいくのは難しい。産地を作らないと」と近藤さんは話す。かつてのように、多くの窯元が集まる「産地」を作ること。それが未来に繋ぐ道だと熱を込める。

「自分の代で10人を育てて、窯元として自立させる。そうすれば、100年は続いていく」そんな近藤さんの想いを汲み、浪江町は伝統的工芸品の後継者育成のため、福島県のクリ

エーター育成インターンシップ事業と連携。近藤さんは、地域おこし協力隊の制度を活用しながら、伝統を継承する人材を育成している。伝統工芸の未来に向けて歩み続ける。その情熱と先見性に共感した若者たちが集まり始めている。

大堀相馬焼の歴史は、300年前の江戸時代に遡る。江戸時代は相馬藩の支援を受け発展し、明治、大正、昭和と時代を重ねてきた。多くの人々がイメージする青いひび模様、疾走する馬の絵、二重構造。これらは昭和に入ってから確立された技法だ。



## 【想いに共鳴した若手がつなぐ未来】

修行に励むのは、青木映真さんと伊藤礼香さんの二人。朝9時、工房に出勤すると、さっそく「ろくろ」に向かう。昼食を挟んで、午後は箸置きや板皿の制作だ。かつての陶芸修行といえば、就業時間はろくろに触ることすらできない。職人の背中を見て学ぶ丁稚奉公のような世界だった。だが、近藤さんの工房は違う。毎日ろくろに向かい、週に一度、職人から直接指導を受ける。毎日手を動かし、技術を身につけられる。「昔とは比べものにならないスピード」で学べる環境が整っている。

「大堀相馬焼という伝統を続けていくためには、その土地でやらなければならぬ。その言葉に一番共感しました」伊藤さんはそう語る。陶芸を志し、他の産地へも訪れた。だが、近藤さんの「土地に根差す」という信念に、強く心を動かされた。青木さんは、事前に近藤さん夫妻や職人に会い、「ここでやっていけそう」という直感を得たという。「今はすごく恵まれた環境にいる。家族からも『頑張っ』と応援されています」とほほえむ。暮らしには、ギャップはなかったのだろうか。「満員電車に乗らなくていいのは嬉しいですね」と青木さん。伊藤さんも、「郡山市から来たといっても、福島市にある大学のキャンパスが山のほうだったので、寒さも同じくらい。大きな違和感はないです」と軽やかに語る。まだ修行を始めて数ヶ月。未来を担う二人の成長が、それにつづく新しい若手が集う陶吉郎窯は産地再生への確かな希望となっている。



伊藤礼香さん(福島県郡山市出身)  
2025年 福島大学大学院 修了  
修行中のちょっとしたうれしい瞬間は、焼成後に窯をあけた瞬間。窯はいっぱいにならないと焼けないので、隙間に入れた箸置きの焼き上がりを見るのがうれしい。休みの日は青木さんとふたりでサーフィンに行くことも。

青木映真さん(神奈川県平塚市出身)

2025年 東京造形大学造形学部 卒業  
修行中にちょっとテンションがあがることは、電動ろくろで大きな器を成形した時。大きなものを作るのがとにかく楽しい。息抜きに地域おこし協力隊員のバドミントン部に顔を出すことも。



イベントで自分たちが作った箸置きを、家族が買ってくれた。まだ修行を始めて数ヶ月。製品として売れるものを作れる段階ではないが、彼女たちは一歩を着実に踏み出している。

## 【弟子は関係人口では語れない】

陶吉郎窯のある浪江町では、震災後に移住してきた若い世代が活躍している。東京から出店したフレンチレストランのオーナーとは今や一緒に酒を酌み交わす仲だという。近藤さんは「関係人口という言葉が、どうもしっくりこない」と語る。最初こそ、この町の中心は浪江「町」出身の人なのだ、という意識は拭えなかった。しかし、交流するなかで、彼らの取り組みやセンスに感心を抱いた。そのうえで、「うちの2人を『関係人口』と言われても、同じように考えてもらっちゃ困る」ときっぱりと断る。「2人は、地域おこし協力隊員という立場で今は在籍しているが、将来は窯元として自立することを目指している。関係人口という枠組みでは語れない」彼女たちは「陶芸体験」や「地域との関わり」といった、楽しみを求めて来たのではない。大堀相馬焼を継承していく覚悟を持って、ここにいる。

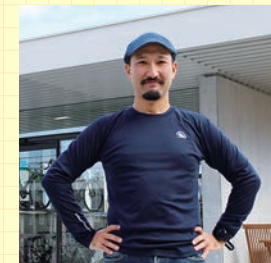
「伝統工芸の産地が生き残るためには、外から新しい人を受け入れ、育て、窯元として自立させていく。それを、自分の代でやりきりたい」近藤さんが目指すのは、自身のスタッフとして困り込むことではない。大堀相馬焼の産地のために、若い世代を育て、独立した窯元として送り出す。日本全国の伝統工芸の産地が、今、同じ課題に直面している。後継者不足、産地の縮小、存続の危機。本来であれば、国や県が力を入れるべき公共性の高い取り組みだ。その中で、近藤さんは新しい道を選んだ。

全国から若い世代を迎え入れ、技術を伝え、産地を再生させる。「自分の代で、10人を育てて、10軒の窯元として自立させる。そうすれば、大堀は産地として100年続く可能性がある」大堀相馬焼は今、未来へ続く道を、新しい方法で切り拓いている。伝統工芸の最前線は、ここにある。



# 福島一年生

最近、福島に住みはじめた人に  
やっていることや住んでみての印象など  
その想い、エピソードについて  
聞いてみました!



川崎 隼輔さん(カワチュン)  
事業統括ディレクター/  
TURTLE CYCLE 店長  
福島歴:5ヶ月



大手自転車小売チェーンの店長を経て、中古スポーツ自転車専門店ピチアモーレ(BAインターナショナル)に入社。自転車系YouTube「ピチアモTV」の顔として発信し、単一動画で20万回超の再生も。実業団レーサー兼メカニックとしてロードレース/シクロクロスで現役。2025年9月末に退社後は福島県富岡町・夜の森地区へ移住。静かで山も近い環境を気に入り、日当たりの良い・パースカフェでコーヒーを楽しみながら、イラストや漫画制作、レースレポート作成に取り組んでいる。



めぐみさん  
大学生  
福島歴:6ヶ月



福島を拠点に活動する大学生。祖父母がいわきに住み、小さい頃から福島を訪れてきた。コロナ禍に長く滞在したことで、福島の空気が自分にとって居心地の良いものだと実感。心身が落ち込んだ時期にも自然に助けられ、人生の節々に寄り添ってきた場所として、大切にしている。浪江の「BASE まちなか」で子どもの居場所づくりに携わる。

## Q1

福島に移住したきっかけを教えてください



川崎さん

もっと広い視野で、将来の自分にはどんな仕事ができるだろうかと考えていました。そうした状況で Rabbit & Turtle の求人を見つけ、それが原子力災害のあった地域での自転車店の開業という内容に琴線が触れ、移住というチャレンジをしました。



めぐみさん

祖父母がいわきに住んでいることから、小さい頃から福島を訪れていました。中学3年生のときにコロナ禍になって授業がなかった時期に、初めて少し長めに祖父母の家に滞在してみたら、私にとって福島の空気が、とても居心地が良いことに気づいたんです！  
その後、高校生のときに体調を崩した時期があり、少しだけ学校に行けなかったのですが、その時も福島にきて、空気と自然にたくさん助けられました。高校卒業後、成人式の前撮りをしたんですけどその時も福島で撮ったんです(笑)

## Q2

福島ではどんなことをやっているんですか？



川崎さん

TURTLE CYCLE は自転車店なので、主に自転車の販売と修理が仕事になっています。スポーツバイクを中心に扱っていますが、ママチャリや電動自転車も対応可能です。

福島の浜通り地域は、サイクリスト目線からしてもとにかく関東地方に住んでいると情報が少ないと感じます。素晴らしい道や環境があっても、それがまだ大多数にリーチできていないのは大きな課題です。自社のYouTubeチャンネルを「起爆剤」にして、このエリアの認知をサイクリストたちに広げていきたいです。

週に2回ほど浪江のBASE まちなかという場所で、こどもの居場所作りを行っています。子どもたちと遊んだり、一緒に勉強したり、自由に過ごしています！

## Q3

福島に移住してから印象は変わりましたか？



川崎さん

福島は関東地方に住んでいると天気予報にも載らない地域です。もっと寒くて冬は自転車に乗れない地域かなと思っていましたが、太平洋沿岸の浜通り地域は気候も穏やかで雪もほとんど降らないので、とても過ごやすく、気に入っています。



めぐみさん

印象の違いは特にありませんね。空気が美味しくて自然を沢山感じられる、温かい場所です。パン屋さんや書店など、お気に入りの場所が増えていっています。

## Q4

これから福島でやりたいことはありますか？



川崎さん

福島浜通りサイクルルートの玄関口として、充実した拠点にしていきたいです。

TURTLE CYCLE に続いて、新たな施設「RABBIT LAB」を隣にオープン準備中です。これはスポーツバイクにおいて、より専門的な施設になる予定で、バイクのフィッティングや、より詳細なスポーツバイクのコンサルタントができるようにする施設です。加えて、サイクルツアー「自転車に乗るなら福島・浜通り」といったイメージづくりに取り組んでいきます。



めぐみさん

海が好きなので、海の近くで、なんでも屋さんみたいなお店をしてみたいです。お茶が飲めたり、本を読めたり、花が買えたり、雑談相談が気軽にできたりするような場所。

バックグラウンドや自分自身のラベルを気にせずにいられるような場所を、いつか誰かをおかえり！と温かく迎え入れられるような場所を、福島で創ってみたいです。



SOSO  
景色

どこまでも青い  
富岡町の仏浜海岸

photo / Misaki Nawa

15年前の規模で開催!

# 山津見神社の例大祭



取材場所はココ!

## 山津見神社について

福島県相馬郡飯舘村の虎捕山中腹に鎮座する、平安時代創建の古社。山の神・大山津見神を祀り、オオカミ信仰の神社として知られる。

かつて3日間で2万〜3万人が訪れ、夜通し賑わった山津見神社の例大祭。2025年12月、氏子の皆さんをはじめとする地域住民、移住者と村内外のサポーターが力を合わせ、15年ぶりに震災前に近い規模で例大祭が復活した。茅に囲まれた茶屋、虎捕太鼓の演奏、現代芸術家による作品展示や、福島ゆかりの俳優たちによる演劇——。伝統を受け継ぎながら、新たな形で更なる自然への祈りと、人々のつながりが織りなす3日間が幕を開けた。



例大祭の顔ともいえる、茅に囲まれた茶屋。足元には手づくりの囲炉裏があり、あたたかい。昔は一晩中大人たちの宴が続いたとか。

## 飯舘村が紡いだ 伝統はいま



「小さい頃に来た、祭りのよう」2025年12月、飯舘村の山津見神社で、15年ぶりに大規模な例大祭が復活した。この復活は、神社周辺の佐須地区だけでなく、飯舘村、そして近隣町村にとっても大きな意味を持つ。山津見神社は、虎捕山の中腹に鎮座し、平安時代の永承6年（1051年）、源頼義が白いオオカミに導かれて凶賊・橘墨虎を捕らえたという伝説から、この地に祠（ほこら）が設けられた。かつての例大祭には、東北各地から3日間で2万〜3万人が訪れ、自然への畏怖と感謝を体現する場として、賑わいに包まれていたと言われている。

参道には名物の茅葺き茶屋が、住民らの手で蘇った。茶屋では温かいそばやおでん、飯舘村の郷土料理「豚肉うどん」が振る舞われる。舌鼓を打つ参拝客から、

笑顔がこぼれた。拝殿には、242枚のオオカミの天井絵が静かに参拝者を見守る。火災で焼失したが、2016年に東京芸術大学の学生たちによって復元。オオカミは「大神」に通じ、山の神の使いとして信仰されてきた。畑を荒らす獣を追い払い、暮らしを守るシンボルとして、村人にとって心強い守り神だ。地域に根付いた狼信仰の文化を、現代にまで守り伝えていく。

満月が夜空に昇ると、力強い太鼓の音がドーンドーンと虎捕山に響き渡る。オオカミ伝説にちなんだ「虎捕太鼓」が福島大学の学生らによって、奉納演奏された。「虎捕太鼓」は全村避難指示が出てから集まって練習することが困難になっていた。休眠状態になっていたが、住民の皆さんが体で覚えていた伝統の技を、1年以上の練習によって伝え、この日を迎えることができた。若者たちの躍動が、人々の心を揺さぶる。太鼓がつかないだ交流、そして15年の時を経て戻ってきた「あの日」の賑わい。それは山津見神社の新たな物語の始まりなのかもしれない。



虎捕伝説を曲にした「虎捕太鼓」は、女性や子どもを中心に受け継がれてきた。地元住民と福島の学生らによって、伝統文化の継承に取り組む。

# 例大祭に 新たな歴史が 刻まれる

見どころいっぱい！

2025年の山津見神社例大祭は、伝統を守りながら、新しい試みを果敢に取り入れた。それは、自然と人間の境界線で生きる飯館村らしい、未来への挑戦だ。



分だけのオオカミを完成させる。かつての祭りを知らない世代が、新しい形で神社の物語に触れる機会となった。

## 飯館のカミサマはどこにいる？



本宮へ向かう森に現代芸術家・鴻池朋子さんの「オオカミベンチ」が置かれた。自然と人間の境界線にある飯館村で、静かに参拝者を迎える。鴻池さんは語る――「神様は、人間によって忘れ去られてしまわないよう、しっかりと守るべき場所、気づかせる場所に向いている」。その時々で、神様の存在を感じる場所に移動させるプロジェクトだ。

## 移住者も地元も一緒に 屋台の賑わい

参道には周辺地域からの出店も含め32軒の屋台が集まった。赤い



## 舞台上に蘇る 虎捕山の物語

屋外舞台では、野宮有姫さんが演出を手がけた演劇が上演され、古くから語り継がれてきたオオカミ伝説が、現代的な表現で蘇る。雪のちらつく幻想的な虎捕山を背に、バイオリン演奏や歌が、観客を伝説の世界へといざなう。昔を知る参拝客からは「いいじゃない」と、称賛の声がこぼれる。新しい表現が、古い祈りの形に寄り添った。



## 大人も子どもも 自分だけの オオカミを描く

境内では、オオカミのお面の絵付け体験のワークショップが開かれた。東京芸術大学の学生たちが協力し、参加者に伝統的な画材を教える。胡粉、金泥、ベンガラ――「縄文からある顔料を採用しています」と学生は語る。参加者たちが思い思いの色でお面を彩り、自



提灯がなんともいえない風情だ。焼き鳥におでん、焼きそば：それぞれの想いが込められた品々が並び、訪れた人々との会話が弾む。震災後に飯館村へ移り住んだ人々も、この祭りを支える大切な担い手となっていた。大学生たちも、屋台を出したり、テント設営をしたり、ボランティアとして携わる。地元の住民、移住者、村内外のサポーター、そして大学生――多様なSOSOフレndsが手を取り合い、祭りを支えた。



## 未来へつなぐ 新しい祈りのかたち

かつての祭りを知る住民の記憶や語りを受け継ぎながら、今の時代にふさわしい形へと更新していく。その営みこそが、山津見神社の例大祭を未来へとつないでいくのではないか。自然と人とを結ぶ場として、山津見神社は今も変わらず、この地に在り続ける。





**岡本さん** 三重県から

和歌山大学の観光学部の学生です。普段は復興の勉強で、大熊町で活動していることが多いんです。飯舘村は初めてきたけど、楽しかったです！

**加藤さん** 三重県から

研究のため、火災前に天井絵の撮影をしていたんです。色々な方の支援によって、復元された天井絵。例大祭を機に飯舘村に来られて良かったです。



# 飯舘村×SOSOフレンズで叶えた例大祭

例大祭がつながり、人々の営み。地域住民のみなさんや、SOSOフレンズ、村内外のサポーターが力を合わせ、実現した15年ぶりの規模の例大祭。この3日間、山津見神社には祭りを支える人、楽しむ人の素敵な「はじめまして！」と「こんにちは！」があふれていました



**塚越さん**

飯舘村から

2019年に東京から飯舘村に移住しました。今日はピリッと辛い焼きそばの出店です。飯舘村に元気でおもしろい人が増えたら嬉しい！楽しいですよ★



**佐藤さん**

大玉村から

私は震災後の飯舘村しか知らないけれど、15年前、みんなが愛した姿が目に見えました。新しい流れを組み入れながら、2つのイメージが交錯する情景が夢心地のようです。



**ヤマダアユミさん** 飯舘村から

自分たちで育てた牛のお肉で、メンチカツを作っています。屋台で熱々を召し上がれ！飯舘村の精肉店「肉のゆーとぴあ」をどうぞごひいきに♪



**右:阿部さん  
左:新井さん**

西会津から

オオカミのお面の絵付けのワークショップをしています。絵付けはちょっと...という方は私たちが描いたお面から選ぶこともできますよ！

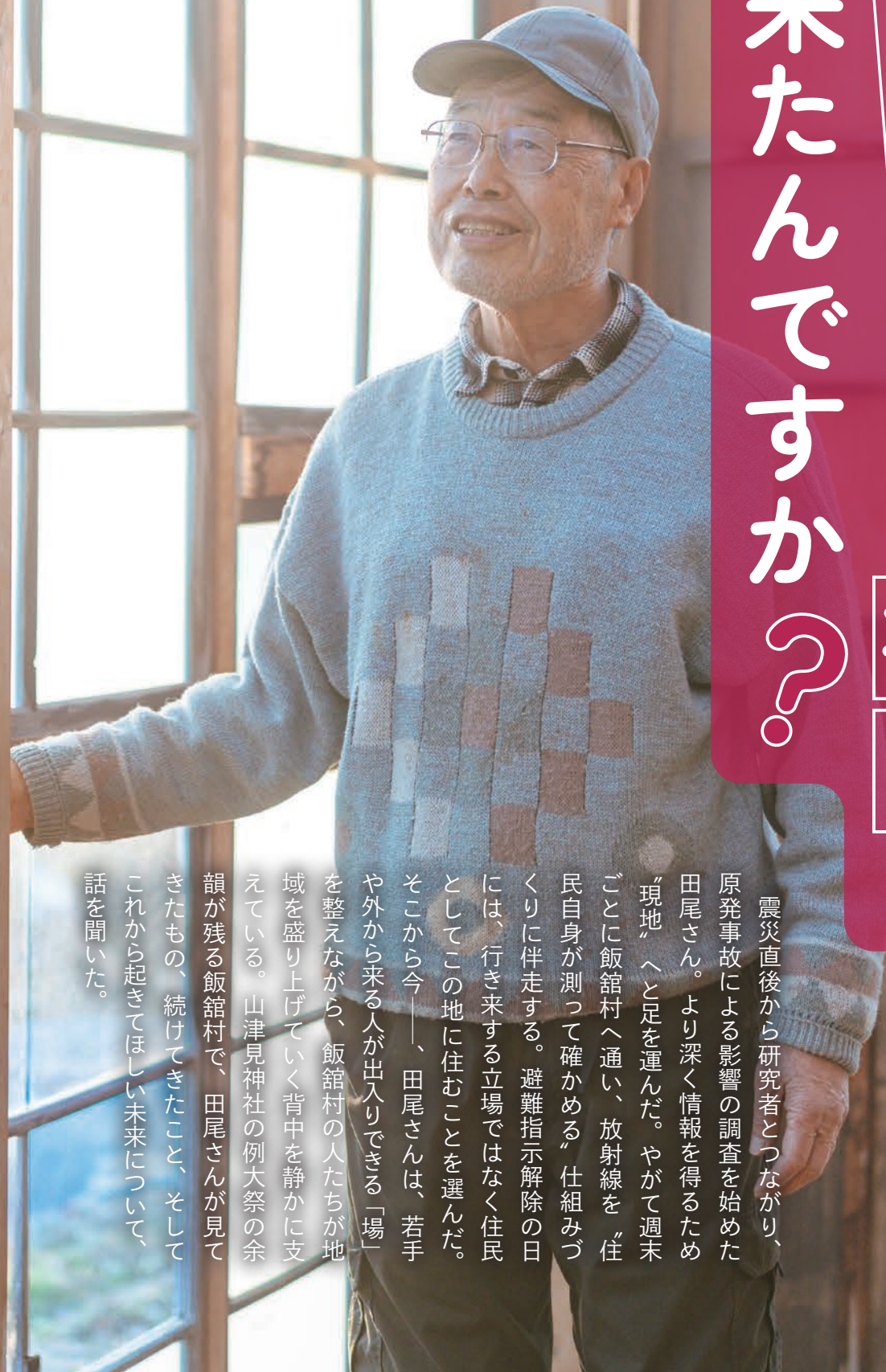


**渡辺さん親子** 福島市内から

テレビで例大祭のことを知って来ました。狼の絵を美術館で見ながら、本物を見たいと思っていました。参道も雰囲気があっていいですね。



# 田尾さん なんで福島に 来たんですか？



震災直後から研究者とつながり、原発事故による影響の調査を始めた田尾さん。より深く情報を得るため「現地」へと足を運んだ。やがて週末ごとに飯舘村へ通い、放射線を「住民自身が測って確かめる」仕組みづくりに伴走する。避難指示解除の日には、行き来する立場ではなく住民としてこの地に住むことを選んだ。そこから今——、田尾さんは、若手や外から来る人が出入りできる「場」を整えながら、飯舘村の人たちが地域を盛り上げていく背中を静かに支えている。山津見神社の例大祭の余韻が残る飯舘村で、田尾さんが見てきたもの、続けてきたこと、そしてこれから起きてほしい未来について、話を聞いた。

「応援」じゃなくて、「好奇心」で来たんです。

「どうして福島に来たんですか？」って、ほんとよく聞かれるんですよ。どうしてなのかって、非常に困るんだけど……最初は好奇心だな、って思う。広島で被爆したからっていうわけでもない。そこは、あんまり関係ないですよ、正直言ってね。物理学者ってどんな人なの？って聞かれたら、僕は「好奇心で生きてる」って答える。お金儲けでもないし、好奇心としか言いようがない。「今、自然ってどうなってるの？」って。事故が起きたときも同じで、それが何を起こしたのか、何が原因だったのか——そこが気になって、僕も福島に現れたんですよ。

震災直後は、どんなことを  
していたんですか？

僕ら何の資格もないから、廃炉の現場とかは警戒されて入れないかもしれないと思った。ただ、物理研究者として、爆発したときに何が起きたかが知りたかった。だから、僕たちは最初に、物理学者ネットワークを作って、世界中に散っている物理学者たちと解析してたんですよ。震災直後から、すぐ動き出した。でも、解析をしてるだけじゃダメで、現地に行かなきゃってなった。

どうして飯舘村  
だったんですか？

いきなり飯舘村を目指したわけじゃないんです。相馬の方に縁があって、知り合いを頼って入った。そこから回っていく流れで、飯舘にも行くことになった。

行ってみたら、避難しているはずなのに人がいるとか、ニュースや数字だけじゃ見えないことが現場にあ

取材場所はココ！



風と土の家は、住民と村外の人々が交流する拠点として開設された交流施設。住民の憩いの場に加え、農業体験や村内ツアーの出発拠点、飯舘村で活動する人々の宿泊拠点として活用されています。宿泊棟は震災時の仮設住宅を再利用しています。

る。そこで思ったのは、結局、住民と接点を作らないと実態は分からないってこと。そこから、村の人と一緒に「測って確かめる」みたいな方向へ、関わり方が変わっていった。飯舘村での調査は、線量の計測をするために高い機械を買わずに、僕らは手作りで線量計を作ったの。村の住民にも貸したよ。自分で測ってねって。東電も政府も測っている、

風と土の家について



「信じねえ」って住民が結構いる。だから住民が自分たちで線量を測る体制を作った。村長を説得してやったんですよ、各地区2人ずつ、月に2回測るように。大事なものは、動くのは僕らじゃなく住民自身のこと。協働ですよ。

**田尾さんご自身が「飯館村の中の人」になったのはいつ頃ですか？**

僕が飯館村の住民になったのは、避難が解除された2017年3月31



ラップ状に音が外に向かうように、わざと設計した。ここは住民やふくしま再生の会のメンバーが好きなきとをやっていい場所として、開いてる。僕は理事長だけど指示をしない。その代わり予算も出さない。やるなら金集めからやってくれ、って。囲炉裏もあって、小学校の黒板とか、子どもの絵とかももらってきて。老人会では囲炉裏で魚焼いて酒飲んで、コミュニティの場なんだよね。この間ね、フランス人の三人組がここに2、3週間いたんだよ。ひとりはアーティスト。ひとりはカメラマンで、チェルノブイリをずっと写してる人。「飯館村にフランス人のアーティスト・イン・レジデンスを作りたい」って言ったから、僕は賛成した。滞在中には村を案内してね、山の上に小さい祠（ほこら）がいくつもあって、馬頭観音とか風の神とか。住民が守ってきた伝統がある。そんな話したら、えらい感動してたよ。

日。避難指示が続いている間は、村としても新しく住民を受け入れるのが禁止の状況だったんです。だから解除の日に役場へ行き手続きをして、震災後最初に村外から転入した一人になりました。移住してからは、当然いいことばかりじゃなくて。まず暮らしを立ち上げるところから始まるし、住まい探しだって簡単じゃなかったね。

**田尾さんはいま飯館村で「何をしている人」なんですか？**

僕はね、ずっと「場を作る」っていうのでやってきた。場っていうのは、いろんな人が集まって透明に議論して、トライして、失敗したり成功したりして、もうちょっと力を入れるかって、試行錯誤する。そういう場が必要だと考えている。それを僕は「公共空間」って呼んでるんで

**田尾さん、これから飯館村に「もっと起きてほしいこと」はありますか？**

いろんな人が出入りするのが大事なんです。誰でも、もっと来てもらった方がいい。土地の問題とか、外国人問題とか、簡単じゃない。コミュニティを戻すのは難しいかもしれないけど、それでも「場」は作らないといけないと思ってる。

**「関係人口」について田尾さんはどう思いますか？**

補助金があるから来る、3年経って別の仕事があったらパツといなくなる、定着しない——そういう人もいる。個人の自由は束縛できないし、束縛した個人は町に馴染んでいかなることが多い。だからね、自分の人生の目的の一つとして、自らの気持ち

です。公共って、政府のことじゃなくて、住民が主体でコミュニティを作っていく、っていう意味ね。ハンナ・アーレントっていう哲学者も「放っておくと全体主義※になるから、防ぐには住民自らが公共空間を作るしかない」と、公共空間の見直しについて話している。僕の解釈だけどね。実践することはとても難しい。だけど実践のようによっている感じなんだよね。

※個人より全体（国家）を優先し、権利や自由を制限して国家が社会全体を統制しようとする考え方

**今日案内してもらった「風と土の家」の縁側もまさに場づくりですね**

窓を開けると舞台になって、外に出た向こう側が観客席になるんだよ。音楽会とかもやってきたね。

でここにきて「やる」ことが、「いいことなんだ」って社会の流れにならないと、おかしいなって。そう思うね。

**田尾陽一さん**

1941年神奈川県生まれ。東京大学大学院理学系研究科・物理学専攻(高エネルギー加速器物理学)修了。元物理研究者で、工学院大学客員教授。IT企業の経営や社会システムデザイン研究など、領域を横断して活動する。東日本大震災・原発事故後、市民ボランティア／研究者／医師らと福島へ入り、放射線量計測や現場調査を経て飯館村に関わるように。飯館村の生活・産業の再生を目指す「NPO法人 ふくしま再生の会」理事長として、「共感と協働」を掲げ、住民とともに農地・山林の計測や実験的な取り組みを続けている







想像以上でしよう？

どういう事？  
なんで福島で？



すごーいよ  
福島！  
魅力的なお店が  
いくつもある！

ただの田舎ではないよ！

ははははは



震災から15年...なるほど...

確かに空も結構あるね...



ここ小高では移住された若い方から地元住民の方までこの街を盛り上げています！

そう、一人一人が「やりたいこと」を  
実現させている  
挑戦のまち  
なんです！

フフフ



ランドビルドファーム

そのうちの1グループと合流した感じでした



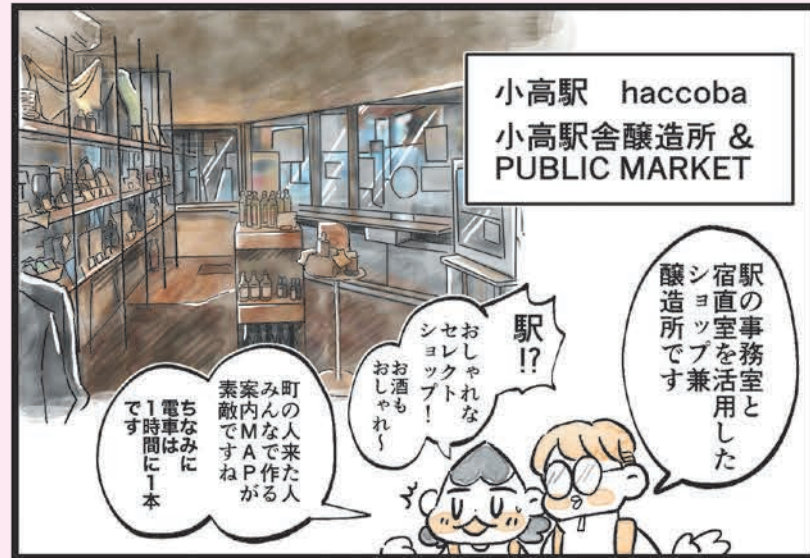
浪江町へGO!!! 今日3グループに分けての作業で



あ、ふくしま未来創造アカデミー受講生の皆さんです

ニンニク!?

合流してニンニクを植えに行きましょう



小高駅 haccoba  
小高駅舎醸造所 & PUBLIC MARKET

駅の事務室と宿直室を活用した醸造所です

駅!?  
おしゃれなシヨップ！  
お酒も  
おしゃれ！

町の人や来たるみんなで作る素敵だね  
ちなみに電車は1本です



時間どきたし... 合流するまで小高をお昼ご飯がてら散策しましょう



アオスバシ  
寿司屋をリノベしたパン屋カフェ & コワーキングスペース

しかも日本各地の美味しいパン屋さんの冷凍パンです！

電源やミニ冷蔵庫もあつて便利です  
地域の人もふらっと立ち寄ります

おいし〜！  
これ冷凍パンなんだ！



佐々木さん

はい！



フルハウス  
作家・柳美里さんがオーナーの本屋

中は木の温かみがあるお店... 家の近所に欲しい！

サラダ記念日だ！  
買ったかな...  
おっちゃん

奥にシアターもあつて色んなイベントも開かれますよ



これが  
先祖の写真で…

サムライだ！  
サムライ  
ガリツクだ！！

ご先祖様が  
刀を置いて  
農業を始めたのが  
始まりです！！

撮影場所  
この庭のま  
いある！！  
ご先祖様  
の馬が…！



しかし…  
歴史資料館か  
というぐらい  
色々ある  
建物だなあ

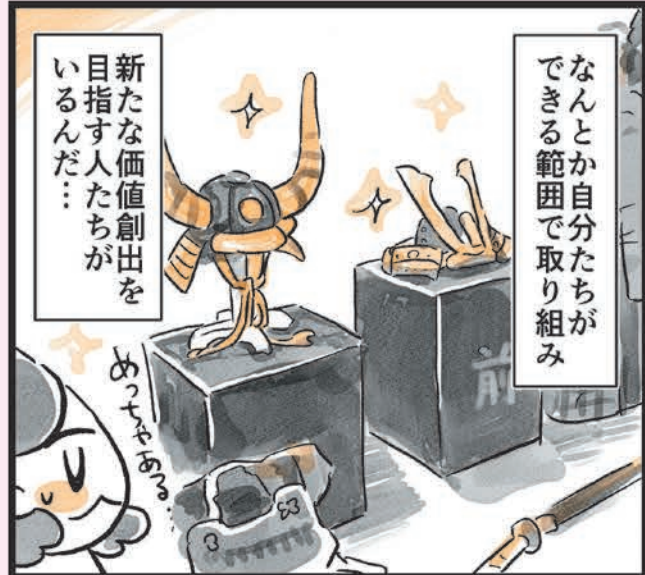
戸棚に  
しまった  
ご先祖様の  
漆器や茶盃  
(レンタルできませ)



避難から  
戻ってきて  
ニンニクを  
育て始めました

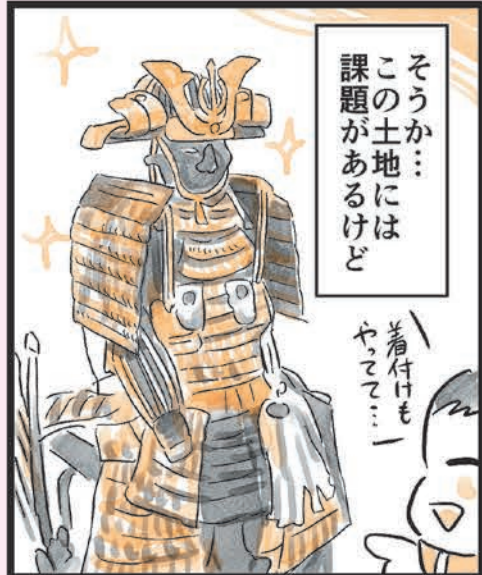
震災がまた  
新たな歴史の  
きっかけにも  
なったんだ…

この辺りは  
皆庭先で  
ニンニクも  
育ててました…



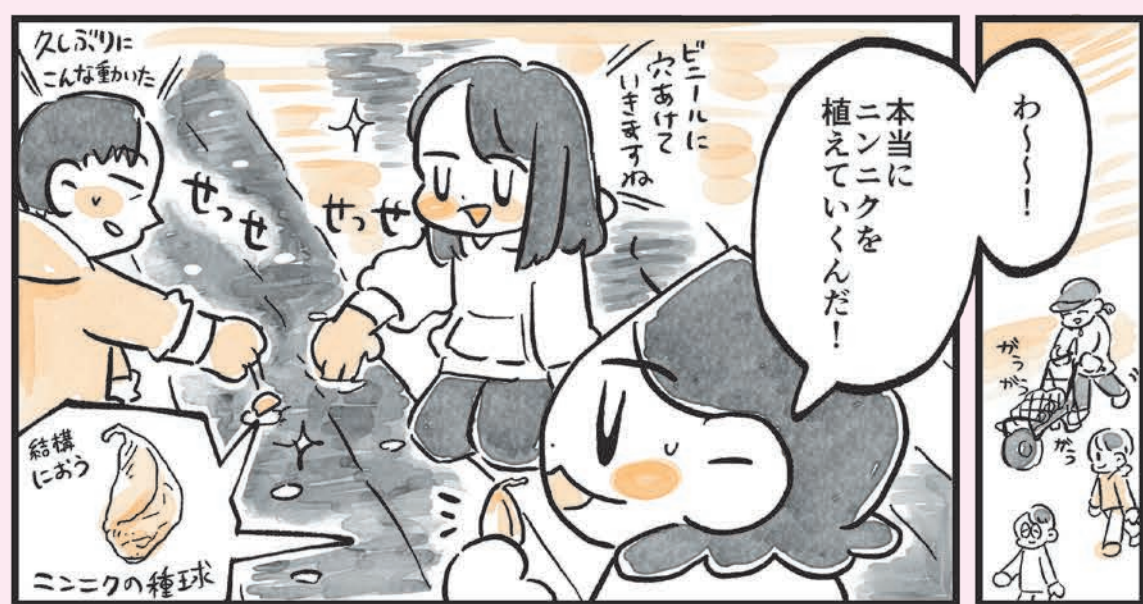
新たな価値創出を  
目指す人たちが  
いるんだ…

なんとか自分たちが  
できる範囲で取り組み



そうか…  
この土地には  
課題があるけど

着付けも  
やってみよう



本当に  
ニンニクを  
植えていくんだ！

わ〜！

久しぶりに  
こんな重たい  
穴あけて  
いきますね

せっせ

せっせ

結構  
にぼう  
ニンニクの種球



元々ここは  
避難指示で  
人が住めない間  
獣害が深刻な  
耕作放棄地で  
ニンニクを植えたのが  
始まりです

ランドビル  
ファーム  
吉田さん



皆さん、  
サムライ  
ガリツク植え  
お疲れ様でした

植えたら  
土をかぶせる



2年前まで  
住めなかつたので  
改修し  
レンタルスペース  
にしました

歴史ある  
建物！



古民家施設  
和坐-waza-

って何この  
豪邸は！

先祖から  
引き継いだ  
家です！



この地域は  
相馬野馬追があり  
馬が身近にいます  
土に馬糞を混ぜて  
しました

そうか伝統も  
意識して

畑からの  
帰り道





## 浪江の古本屋 コウド舎 3

浪江町にある「STUDIO B-6」内にある古本屋「コウド舎」さんは、本のセンスがよく、また地元の方の本が多く、“良い”の一言につきます。

福田さん／仙台市在住

編

カフェやシェアキッチンもあり、読書会やDJイベントも定期開催されるまちの文化発信基地！

編

実は夏は涼しく冬はあたたかい快適スポット！探検コースがおすすめです。



## 城跡の古民家カフェ n∞(ノ) 4

つるまるさん／新潟市在住

編

城跡の里山に佇む古民家で、心ほどけるカフェ時間を。オーナーが継承し栽培しているナツハゼを使ったナツハゼスカッシュは、サッパリしていて飲みやすいです！

編

天气がよければ、青い空と海をひとりじめ。人気の映えスポットです！！

## 富岡町の 仏浜のブランコ 6

富岡町の仏浜のブランコが良い景色の中でこくと気持ちよいと思います！

オバマさん／さいたま市在住

## 田村市の あぶくま洞 5

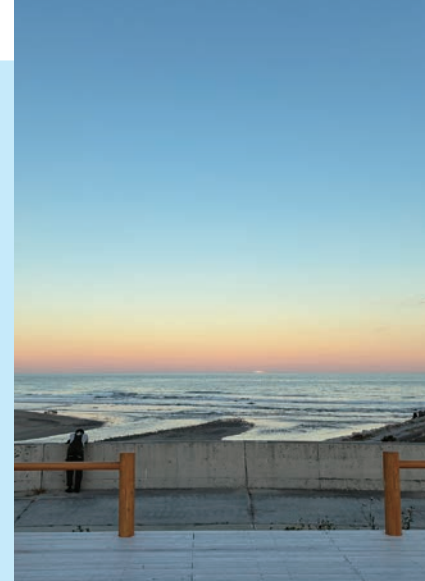
行ったら想像以上に奥深く面白かったです。

マッキーさん／東京都北区在住



## 1 富岡漁港

海がめっちゃくちや綺麗です！  
二輪さん／東京都新宿区在住



郡山海岸・双葉町 / 村上海岸・南相馬市、が個人的な推しです。

ひげめがねさん／横浜市在住

編

穏やかな海でSAPを楽しむ人や浜辺を散歩する人の姿も。水面が「ウユニ塩湖」になる瞬間も見逃さないで！

編

鈴木酒造さんの酒蔵が併設。試飲やここでしか買えない限定アイテムもおすすめ。



## 2

## 道の駅なみえの SAKEKURAゆい

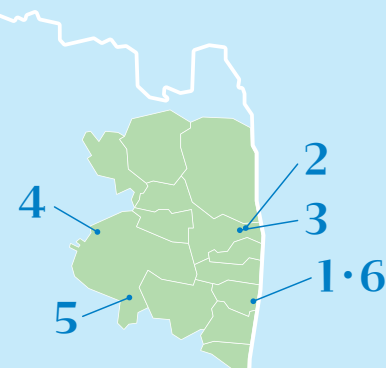
メニューの種類が豊富で楽しめます。特に甘酒のソフトクリームはほんのり香る甘酒のバランスがちょうど良くておすすめです！

石川さん／川崎市在住

SOSOフレンズ  
セレクト

# 福島12市町村 おすすめスポット

SOSOフレンズのみなさんがよく行く場所&推しスポットをご紹介します！



# FUKUSHIMA

SOSOフレンズノート

福島には、  
楽しいから  
来てるんです

## 笹野祐矢さん

明治大学経済学部の2年生、ボランティアサークル「SHIP」所属。1年生の頃、福島相双復興推進機構が主催する「F12FLY(フライ)」プロジェクトで福島と関わり始め、月1回のペースで通い続ける。

生まれも育ちも東京

「フツオに帰るぞ」

ホントにフツオでいる自分がいます

笹野さんが福島に通い始めて、1年半が経とうとしている。月に1回程度のペースが最近のリズムだ。きっかけは、所属するボランティアサークルで、福島12市町村の若手キーパーソンと繋がる「F12FLYプロジェクト」に参加したことだった。通常、ボランティア活動は上級生が主体となって企画するパターンが多い。けれど、このプロジェクトは違った。1年生だけでも活動できることに惹かれて、笹野さんは手を挙げた。「自分たちが主体だからモチベーションが違いますね」自分の意思で関わりを持つ。そのきっかけを掴んだことが、笹野さんと福島の関係性を深めていった。

### ボランティア以上 移住未満を軽やかに

その後、笹野さんは、サークル内にモルック部を立ち上げた。福島でモルックをするために、仲間を集めて何度も訪れている。ボランティアという枠を超えて、笹野さんにとって福島は「東京にない、楽しい場所」になっていった。「正直、今はボランティアって感じはしなくて。楽しんでるだけなんです」自然体で楽しんでいるからこそ、周囲を巻き込めるのだろう。「卒業後かあ…移住とかは考えてないです。でも、2ヶ月に1回くらい、福島に来られるような生活が理想です」ほどよい距離感で福島と付き合い続ける。この軽やかさ、まさにSOSOフレンズなライフスタイルと言えるのではないだろうか。

### 訪れるたび 好きなコトが増える

飯館村、楡葉町、富岡町。訪れるうち、福島の魅力に引き込まれていった。それは、東京に戻ったときに気づくものだった。「東京に帰ってくる時、もう疲れがどっと来るんですよ。福島にいたときは、のびのびしてたんだったってあとから気づかれます」人混みを気にせず、夜には満天の星空が広がり、空気が澄んでいる。宿の方は大学生が来てくれることを喜んでくれて、何かとサービスしてくれる。あたたかく、自由な時間がそこにはあった。

春に訪れた飯館村の飯館復興三千本の桜。桜が満開だった。東京にも桜はあるけれど、ここの桜は違った。「めちゃくちゃ綺麗で。東京では絶対に味わえない景色でした」また、福島12市町村に通ううち、この地域で静かなブームになっている「モルック」に出会う。北欧フィンランド発祥のスポーツであるモルックは、木の棒を投げて的に当てる、ボウリングに似た競技だ。最初は大会の手伝いのつもりだったが、気がつけば地域で開催された大会に選手として参加していた。そして、すっかりハマってしまった。



見頃を迎えた飯館村の「飯館復興三千本の桜」。首都圏の大学生による「F12FLYプロジェクト」をきっかけにつながった飯館村で、誇らしげに咲く桜とともに過ごしたある春の日。



### MÖLCK



モルックを通じて福島に触れる機会を増やすべく、サークル内で合宿を企画。富岡町・夜の森地区にある蓮畑で草むしりボランティアを終えたあと、夜ノ森公園で存分にモルックの練習に励む。

流れに身を任せて  
今日を楽しむ

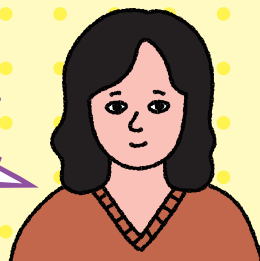


茶 須 左

山津見神社例大祭で15年ぶりにかつての規模で復活した「佐須茶屋」はまさに祭りの顔。かつて3軒あったうち、1軒が参拝者を迎えた。以前は調理から店番まで、ほとんどを家族や親族でまかっていたそう。今回の例大祭は外から来たSOSOフレンズ達も積極的に混じりあう。

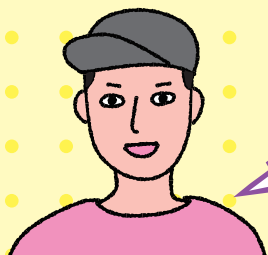
2025年12月、飯館村で15年ぶりにかつての規模で復活した山津見神社の例大祭に呼ばれたときのこと。祭りを彩る顔とも言える「佐須茶屋」の店番を任された笹野さん。地元の人たちと言葉を交わしながら、雪のちらつく店先でお客さん呼び込み、案内を務めていた。「誘われるがままに、何するかわからないまま（12市町村へ）行くこともあるんですよ。でも、それが面白い」ボランティアや手伝いをするつもりだったものの、到着してみると状況は違っていた、なんてことはよくあるらしい。「そういえば春に来たときは、僕が担当する予定だった焼きそばがもう売り切れていて。結局、純粹な花見客として楽しませてもらいましたが、そんな計画通りにいかない感じが、またいいんです」予定調和ではいけない非日常の中で、その場の流れに身を任せてみる。それが笹野さん流の、この地域を楽しむ秘訣なのだ。

中高の部活でつながり続けていたおじいちゃんがきっかけ。でも初めて福島を訪れたのは、この「**ふくしま未来創造アカデミー**」の講座がきっかけです!



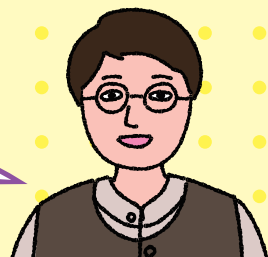
酒見さん / 山梨県丹波山村在住

2014年ごろ、**会社の研修**で震災後の福島にお伺いした時に衝撃を受けて、何か自分たちの世代でできないかと考え、「行く」「買う」「働く」を実践してみようと思いました。



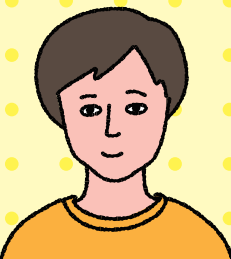
オバマさん / さいたま市在住

**福島県内出身** (中通り・郡山市)なので!



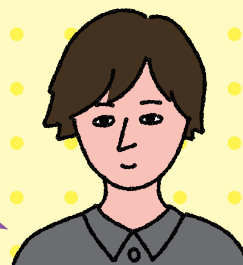
ひげめかねさん / 横浜市在住

過去に**福島県内で仕事**をしていたことがあり、思い入れがあったため、関わってみようと考えました。



マッキーさん / 東京都北区在住

2011年は秋田に住んでいましたが、**震災、原発、仕事**がきっかけです。

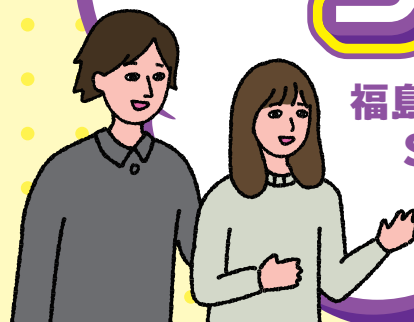


つるまるさん / 新潟市在住

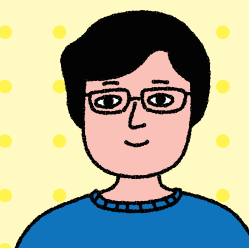
# YOUは何しにSOSOに?

福島12市町村に関わるきっかけをSOSOフレズみなさんに聞いてみました!

illust / Haruka Kuroda



元々親戚が福島の会津にいて、小さい頃から関わり、2014年は**旅**で2024年は**インターン**で浜通りに行ったことで福島での活動をスタートさせました。



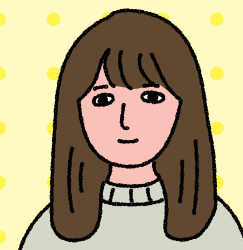
二輪さん / 東京都新宿区在住

大学院の指導教官に勧められてこの地域の**まちづくりワークショップ**に参加したのがきっかけです。



福田さん / 仙台市在住

アーティストグループ「**TOKIO**」が行っている福島県の活動に憧れを持ったことがきっかけです。彼らが福島県に足を運び、農作業や特産品のPRを通して地域との関わりを深めていく姿が素敵だと思い、自分も福島県に行ってみたいと思うようになりました。



石川さん / 川崎市在住



SOSO  
景色

# 大熊町で 咲き誇る山茶花

photo / Eri Adachi



SOSO  
景色

# 飯舘村 「風と土の家」にある 小学校の黒板

photo / Eri Adachi

取材場所はココ!

## 大熊町役場について

避難指示解除後、2019年大川原地区に新たに建設された町役場。木材を多用することで、まちなみや自然景観と調和した、防災・災害対策の拠点になるなど、災害にも備える大熊町復興のシンボル。



原発事故によって全町民が避難せざるを得なかった大熊町。その後、長い時間をかけながら、町は少しずつ形を変えながらも、いまも復興の途中にある。幾橋さんは、生まれも育ちも大熊町。事故までは町内で暮らし、役場職員として働き続けてきたが、現在は町の外に住みながら大熊町役場へ通勤し、教育に関わる仕事を続けている。

復興が進むにつれ、町に学校が戻り、関係人口や移住者も増えた。風景も人の流れも大きく変わりつつある一方で、そこには喜びだけでなく、寂しさや戸惑いなど複雑な思いも重なっている。「町の外に住みながら、町の中で働く」立場にある幾橋さんに、関係人口が増える今の大熊町をどう見ているのか、率直な思いを伺った。

— 幾橋さんに聞く、

# 大熊町と関係人口のいまとこれから

「関わり方は、人それぞれでいい」



**幾橋みね子さん**  
大熊町役場教育総務課長。生まれも育ちも大熊町。東日本大震災後は郡山市へ移住し、現在は片道1時間半をかけて町役場に毎日通勤している。愛犬はトイプードルの「こまめ」。



「大熊町立学び舎ゆめの森」全国でも珍しい、認定こども園と義務教育学校の子どもが共に学ぶシームレス教育を採用



### 外から来る人のエネルギーに助けられている気がします

私は生まれも育ちも大熊町で、結婚してから町内で暮らしていましたが。役場の仕事も、ずっとこの町で続けるものだと思っていたんです。

2011年の震災で町を離れてからは、いくつかの避難先を経て、今は郡山市に住んでいます。でも職場は大熊町なので、車で毎日通っています。片道1時間半くらいで、往復すると3時間ですね。人から大変だねと言われることもあります。通う生活が長くなると、それも自分のリズムになってきます。行き帰りの時間って、気持ちを整える時間にもなるんですよ。

今は役場で教育に関わる仕事をしています。学校が町に戻ってきたことで、町の雰囲気は変わったと感じています。町の中から子どもたちの声が聞こえるとか、自転車で走って

いるのを見かけるとか、そういう当たり前だったはずの風景が少しずつ戻ってくる感じがあって。その流れの中で、外から町に関わる人たちと接する機会も少しずつ増えてきました。

外から来る人たちを見ると、「エネルギーがあるな」と感じる人が多いです。住む場所や仕事を変えるって、簡単なことじゃないと思うんですけど、それでも「ここで何かをやってみたい」「関わってみたい」という気持ちを持って来てくれる。そういう気持ち自体が、町にとってすごく大きい気がします。関係人口って言葉は一括りに見えることもあるんですけど、実際には関わり方がいろいろで。学校のことから入る人もいれば、仕事のプロジェクトで出入りする人もいるし、まずは通ってみる、っていう距離感の人もいます。私は、その「いろいろ」あること自体がとてもいいなと思っています。



### 嬉しただけじゃなくて 複雑な気持ちも残る

もちろん、人が増えてきているのはうれしいです。町が動いている感じがしますし、少しずつ「暮らしの輪郭」が見えてくる感じもあります。ただ、その一方で、町の中に複雑な気持ちがあるのも分かる気がします。「移住者や外から来る人が増える」っ

はもう「大熊の人」だと思っています。どこから来たかで分けなくていいというか、本当は分けたくないです。でも、現実には、気持ちとして線が引かれてしまう瞬間もある。だからこそ、話すことが大事だと思います。一緒に大きなプロジェクトをやらなくても、同じ場所で同じ話をするだけで、距離が縮まることってある。元からいる人の中にも、町のことを伝えたい、教えたいって気持ちはちゃんとあります。外から来た人がそれ

て、言葉だけ聞くと前向きに聞こえるんですが、元々ここで暮らしていた人の中には、簡単に気持ちを追いつかない人もいます。戻りたい気持ちはあるのに戻れない人もいるし、避難先で生活が出来上がっている人もいます。そういう人にとって、町がどんどん変わるのを、嬉しさだけでは受け止められないところもあると思う。町の様々な施策の見え方として、「外から来る人が優先されている」と感じてしまうこともあるかもしれない。町としては、帰還する人も、外から関わる人も、どちらも大事にしたいと思っけていても、気持ちの部分ってそんなにきれいに整理できないので。そこは、いつも難しいなと思います。

### 外から来た人だからこそ 見えてくるものがある

でも、外から来た人だからこそ、町のことを丁寧に見てくれる場面も

を受け止めてくれると、町の中の空気も少し柔らかくなる気がします。私は、そういう「間」を増やしていきたいなと思っています。

大熊町は、今も復興の途中です。変化のスピードが速い町だと思います。だからこそ、完成した姿だけじゃなくて、変わっていく途中に触れてもらえたら嬉しいです。まずは一度来て、見て、感じてほしい。そういう町でありたいなと思っています。

あって。私はそこに、すごく助けられている感じがあります。町の中にいると、どうしても「当たり前」になってしまっけて、気づけないことがあるんですよね。外から来た人は、初めて見るものを「これって、すごいですな」って言葉にしてくれる。そうやって町の価値を見つめ直すきっかけをくれることがあります。それに、関係人口の人たちは「自分のやり方で関わってくれるところがいいな」と思うんです。大きなことをいきなりやるんじゃないくて、まず話を聞いてくれるとか、記録してくれるとか、静かに続けてくれるとか。町にとって必要なのは、派手なことだけじゃないので。そういう関わり方が、結果的に町の土台になることもある気がします。

### 内と外、線を引かないで いられる町にしたい

私は、大熊に来た時点で、その人



SOSO  
景色

原ノ町で見かけた  
ふわふわの犬

photo / Eri Adachi



どこか遠くに  
いる誰かの  
ことを  
思い出して  
ください。

SOSO  
景色

小高駅の  
誰かを想うアート

photo / Eri Adachi



#### 4 いちご狩り体験

川俣町／観光農園スマイルファーム  
6品種以上のいちごが50分間食べ放題で楽しめる観光農園。時季によっては、福島県の新品種「ゆうやけベリー」も味わえます。広々としたハウスと、充実した休憩スペースが魅力。3歳未満は無料で、キッズ優先のいちご狩りエリアも常設。他にも、アンズリウム栽培も手掛け、フラワーアレンジメントなど様々な体験ができるスポットです。

☎ 070-4084-2799  
📍 伊達郡川俣町山木屋社前32-1



#### 5 刺身定食

檜葉町／海・鮮・料理よしだ  
JR常磐線・竜田駅前すぐ。肉厚の刺身と小鉢の付け合わせも絶品で、地元住民や周辺で働く方々に愛される定食屋です。新鮮な魚介を使った「刺身定食」の他、アジフライや天ぷらなど、揚げたてのメニューも人気。リーズナブルな価格で海の幸を堪能でき、ランチタイムには行列の絶えない名店です。お腹を減らして並べし!

☎ 海・鮮・料理よしだ:0240-25-2253  
📍 双葉郡檜葉町井出木屋126-1



葛尾村復興交流館あぜりあ  
自動販売機で買える!



#### 6 メルティシープ

葛尾村／牛屋  
畜産農家・株式会社牛屋が手がける、葛尾村産のブランド羊肉。その名の通り、とろける脂と柔らかい赤身が特徴で、羊肉が苦手な人をも虜にする絶品! 黒毛和牛で培った飼育ノウハウを活かし、徹底した健康管理の下育てられています。村内の「復興交流館あぜりあ」の冷凍自動販売機で購入可能。ふるさと納税の返礼品などでも注目を集めています。

HP [www.ushiya.co.jp/](http://www.ushiya.co.jp/)  
📍 双葉郡葛尾村上野川仲迫27-11



#### 7 三角揚げ

田村市／渡辺豆腐店  
国道399号沿いの山間にひっそりと佇む知る人ぞ知る豆腐店。三角揚げは、阿武隈山系の湧き水を使った看板商品です。低温と高温で2度じっくり手揚げし、ふっくらサクサク! 生地は香ばしく、軽やかな食感にくせになるおいしさ。店内ではタレにつけて実食することができ、地元で愛される味。揚げたてに出会えたらラッキー!

☎ 0247-75-2595  
📍 田村市都路町岩井沢西光地99-2

そうそうコレ! と言いたくなる

## SOSOグルメコーナー

「そういえば、これ知ってる?」と語りたくなる  
「そうそうコレおいしいのよね」と贈りたくなる  
おいしいもので巡る、福島12市町村  
SOSOグルメをご紹介します!



#### 1 みかんジュース

広野町／広野町振興公社  
広野町産の温州みかんを100%使用したストレートジュース。濃厚な甘さと、ほろ苦さが調和したフレッシュな味わいが魅力です。広野町の太陽をたっぷり浴びて育ったみかんの旨味が凝縮されており、無添加で安心。トロピカルフルーツミュージアムや直売所「のらっこ」で購入可能。販売時期が限られており希少性の高い一品です。

HP [www.hirono-kousha.com/](http://www.hirono-kousha.com/)  
📍 双葉郡広野町大字下北迫字大谷地原65-3



#### 2 浜鶏ラーメン

富岡町／浜鶏さくらモールとみおか店  
はまど〜り  
戦後の富岡町のお祭りで行列ができたという幻のラーメンが起源。コクのある濃厚な白湯系とあっさりとした鶏がらスープの、まさにいいとこ「どり」! 低温調理でやわらかく仕上げた鶏むね肉と、圧力鍋で炊き上げた鶏もも肉に、特製煮卵をトッピングした鶏づくしの一杯。浜通りの新名物として人気を集めています。

浜鶏さくらモールとみおか店 ☎ 0240-25-8614  
📍 双葉郡富岡町中央3丁目416



#### 3 シカクイキウイ

大熊町／ReFruit  
かつて大熊町の特産品として愛されたキウイフルーツを再生させようとする取り組み、株式会社ReFruitsが手がける焼き菓子。四角いクッキー生地の中に甘酸っぱいキウイ餡を詰めました。大熊町では「クマSUNテラス」内の「ふたば文具」「panier」、「デイリーヤマザキストア大川原店」で購入できます!

HP [www.kiwinokuni.com/](http://www.kiwinokuni.com/)  
📍 双葉郡大熊町下野上清水584



はじめまして。SOSOフレンズ編集部と申します。  
ぜひ一緒にいただきたい企画があり、ご連絡させて  
いただきました。

お願いしたいのは「今の福島を知れる本の選書」です。  
本屋さん、外から来た方も地域に住む方も立ち寄れる  
場所だと思っています。日々のいろいろな方と交流のある  
本屋さんの視点で「こういう福島もあるよ」と伝えたく  
なる本を選んでいただけないでしょうか。

肩肘張った“正解の一冊”というよりも、「これがのい  
とを感じる本をご紹介いただけたらとても嬉しいです。  
どうぞよろしくお願ひします。

# 「SOSOな本屋さんに聞く 今の福島を知れる本」



## 読書屋 息つき

読書屋 息つきは福島県双葉郡大熊町に開かれる  
本屋です。ひねくれ者の店主なもので「読書屋」  
なんて名乗っています。

住所: 双葉郡大熊町大字熊字旭台25-17  
営業時間: 18:00~21:00  
定休日: 月曜日、雨や雪の日  
Instagram: @ikitsugi



## 本と喫茶 コウド舎

浪江町にあるSTUDIO B-6に入居する本屋、コウド  
舎です。はじめは浪江町内で、今ではあらゆる場所  
から、いろいろな経緯で本がゆっくり集まっている  
古本・新刊・ZINEを取り扱うお店です。

住所: 双葉郡浪江町川添佐野51-4 STUDIO B-6  
営業時間: 11:00~18:00  
定休日: 水・木曜日  
Instagram: @ko\_do\_sya\_namie



# SOSO! クロスワード

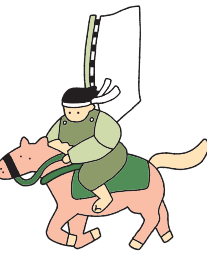


22~25を  
つなげると

- 22
- 23
- 24
- 25

1	2		3		4	5	
13			14		23		6
15			7				
	16			8		9	
10		17	11	24		18	
19					12		
		20					
21	25		22				

ヒントで浮かぶワードを  
書き込んでね!



### ▼ 横のヒント

- 1 木の棒を投げるフィンランド発祥のニュースポーツ。福島でも大会が開かれています。
- 4 伸びたら切ったり、機会をねらって研いだり、甘かったり。
- 8 「相馬地域」と「双葉地域」を合わせて、何地域と呼ぶ?
- 12 現実にはない、壮大な物語や冒険、恋愛などへの憧憬
- 13 日が暮れてからしばらくの間のこと。「〇〇の明星」
- 14 「不思議な」「見知らぬ」「不慣れな」。よそ者が語源です。
- 15 ビールを飲むと美味しく感じられる非常に薄い硝子で作った〇〇〇〇グラス
- 16 現在や現代のこと。家族がふだんいる部屋
- 17 マリオやドラえもんでおなじみの筒型のもの
- 18 母親に代わって子育てをする女性のこと。スリランカの高地で生産される高級紅茶の一種。
- 19 相馬地方で行われる甲冑に身をかためた約400騎の騎馬武者が野原を疾走する。
- 20 わび茶の完成者として知られる安土桃山時代の茶人は誰? 「センノ〇〇〇〇」
- 21 ケガ。不完全な所。欠点。心をいためること。「〇〇を負う」
- 22 浪江町、葛尾村、双葉町、大熊町、富岡町、川内村、楡葉町、広野町の6町2村から成る郡

### ▼ 縦のヒント

- 1 織物、染め物、工芸品などの表面に施された絵、形、図形(文様)の総称
- 2 過去の事例や他社の事例(類似点)を分析し、推測すること。アナロジーとも言う。
- 3 〇〇〇も過ぎれば毒となる。
- 4 パートナーとして未永く〇〇〇〇。もう少しで魚が〇〇〇〇。
- 5 パスタやうどんなど小麦粉を成形した細長い食品
- 6 「本線」や「新幹線」を名乗らないJR線の中では最も長い、太平洋側を走る路線は何線?
- 7 福島県を3つに分けたとき会津地方・中通りと並ぶ海側の地域は?
- 8 減ったり、傷ついたりすること。できればしたくないもの
- 9 青ひび、二重焼き、駒の絵などの特徴を有する「大堀〇〇焼き」
- 10 小説・評論など文章を書く職業の人
- 11 ある行動や決定を行うと、元の状態に戻れなくなる地点を指す用語「〇〇〇〇能点」
- 12 日本語では「年老いた女性」、中国語では「妻」や「奥さん」を指す言葉。

## 本と喫茶 コウド舎 おすすめの本



詩集 美し森と海風  
斎藤和子 著・土曜美術社出版販売

ある日、この詩集をたずさえてコーヒーを注文された方がいました。あたりの景色や浪江町で過ごしていた時間を思いだしながらお話をなさりながら、手元の詩集を差しだし、ぜひここへ置いてほしいと、この詩集の存在を教えてくださいました。生まれ育ち生活し、生み育てた土地。そこに吹く風の香りが、たしかな人生の時間とともに否応なしに染みこむような詩集でした。

コウド舎は古本屋さんでもあります。ここ浪江町だけでなくそれぞれの町にある、その地に吹いている風のいろを伝えるような言葉を伝えられるのが本であり、古本屋はそんな作品が古きも新しきもともに並び、出会える場所でもあります。ただ古本は偶然の1冊との出会いでもあり、この詩集の紹介も出会いの一例のようなもの。紹介されていた本を探しながら、あなただけの出会いがあるかもしれません。もし機会があれば、福島県にお越しの際は旅先の古本屋さんに寄り道をしてみてください。



Polyphony series; THE MOVING  
Bulb-6 ZINE gathering 著・STUDIO B-6

いまこの地域に住んでいる人って全員引越しをしているよね——。避難、復興、移住促進のなかさまさまな思いが重なり、複雑な文脈を帯びるこの地域を、「引越し」という切り口で見つめなおすシリーズ。ここ双葉郡に人生のいずれかの時間、身を寄せることとなった人々へ「引越し」のお話をたずねる。他愛もないようなことから人生の転機をふくんだ個々の声からたちあがってくる、まだ見ぬこの地域の立体感を期待しています。コウド舎も入っているシェアプレイス、STUDIO B-6に集うサークルでつくられる有機的な一冊でもあり興味深いです。聞き書きを続けていく予定のため、読者がファイリングしていけるかたちで作られたZineとして発売中です。



NEUTRAL COLORS vol.3  
加藤直徳 著・NEUTRAL COLORS

こだわられた質感とデザインに魅了されて手にとった先、その号でたてられたテーマと向き合い、時にはにらめっこするほどに向き合っている気がする。テーマをたどるなかで深くも視野もひらかれていく、つい話を聞きたくなる先輩のような信頼のおける雑誌です。ひろがる視野の先に福島をとらえる号があります。まさか出てくると思わずに読んでいたからか、掘り広げられていくテーマの先にあったからか、福島だけのことを書いてある本を読むのちがった出会いができた経験でした。

本と喫茶 コウド舎 店主 佐藤さんより

## 読書屋 息つき おすすめの本



ロッククキッチン  
川内有緒 著・講談社

「今の福島を知れる本」むずかしいです。なぜならわたしには「今」も「福島」もよくわからないからです。わたしにとってかろうじてわかりそうな「最近」と「ここらへん」に言葉を変えてみます。「最近」の「ここらへん」に触れられる本を考えてみます。

福島県外のひとたちがたまに店に訪れます。特に東京など都会から来られた方は「星がきれい」と言います。もっときれいな日があるのになあと。でも、そんなにきれいな日ではないのにそう言われるということは、都会の夜空がよほどきれいでない、もしくは、都会のひとたちにとって「ここ」というのは夜に星空が見えてほしい場所、という事なんだと思います。きっとどちらでもあるのだろうなと思います。お客さんを楽しませるべき「店」をやっている者としては、そのどちらも感じながら、「そうですね」と呟いて次の日もまた星空の下で店を開きます。

『ロックク・キッチン』という本があります。2025年11月20日が発売日になっています。これを「今」と呼ぶのか、わたしには判断がつかません。「最近」とは呼べるでしょうか。『ロックク・キッチン』は2025年度(第35回)Bunkamura ドゥマゴ文学賞を受賞し、全国的にも注目されているように見えます。今更わたしが紹介しなくても、と強く思います。家の近くの図書館でこれを書いているのですが、今度「ロックク・キッチン」の映画が上映されるということで図書館でも大きく取り上げられていました。ここらへんでも話題になっている本なのだと思います。

「みんな、なに食べて、どう生きてるんだろ？ 福島第一原発事故から14年、国道六号線(ロックク)を旅して綴った温かくておいしい記憶」

この本の出版社である講談社のホームページにある紹介文です。当たり前なのかもしれないのですが、本は内容に着目されます。何が書かれている本なのかと。この本も同じように書かれている内容に注目が集まっています。けれど、わたしには少し違う見え方で見えています。その見え方が、わたしにとっての「ここらへん」に触れる可能性なのかなと思います。この本は、「生活や仕事で東京などの都会に軸足を置きながら『ここらへん』とその外とを往復して書かれた本」だとわたしには見えています。

実際に本に書かれているのは「ここらへん」のことです。しかし、もう一つの実際として、「ここらへん」の外にも生活や仕事がある人が「ここらへん」とその外とを往復して書かれた本であるという実があります。このことには、さまざまな意味があるように思います。「ここらへん」の外にも生活や仕事がある人が書いたということ、そのために幾たびかの往復という時間がかけられたということ。「ここらへん」で感じたことを書いているのは「ここらへん」の外であったかもしれないという当たり前のこと。

その当たり前から生まれる「ここらへん」にいるわたしには触れられない「ここらへん」がそこに書かれているという可能性。わたしは「ここらへん」で仕事や生活をしている人間として、だからこそこの本によって触れられる「ここらへん」があるように思います。それは、都会からやってきたお客さんがそれほどきれいでない日の星空をきれいだというときのようです。わたしは「ここらへん」で仕事や生活をしている人間として、だからこそこの本によって触れられる「ここらへん」があるように思います。お客さんの言葉はわたしには触れられていないことだからです。ひとりで「ここらへん」にいるだけでは、触れられないことがたくさんあるのです。触れられて感じることの明言をわたしはずっと避けています。触れるということに痛いと感じる人もいます。心地よいと感じる人もいます。わたしはどうだろう。自分の感覚に鈍感なわたしは、それを言葉にするのに時間がかかります。でも、まずは触れてみようと思います。そうしてそこから、考えてみようと思います。ということでどうでしょうか。『ロックク・キッチン』という本に触れてみては。開いてみては。読んでみては。

読書屋 息つき 店主 武内さんより

本冊子『SOSOフレンズ』の刊行にあたり、ご協力いただいた皆さま、そして本冊子を手にとってくださった読者の皆さまに心より御礼申し上げます。

私たちは、福島12市町村における関係人口の創出・拡大を目的に、さまざまな取り組みを行ってきました。本冊子の制作にあたり福島12市町村への想いや関わり方をお聞きする中で、この地域を応援し、ゆるやかにつながる「SOSOフレンズ」の輪が着実に広がっていることを改めて実感しました。

ご覧の通り、その関わり方はさまざまです。しかし、その関わり方(手段)は多様でも、どの方も自分自身がこの地域を「好き」である気持ち、そして大切に思う気持ちは共通しているのではないかと感じております。

本冊子でご紹介できた事例は、その一部に過ぎません。福島12市町村にさまざまな形に関わる「SOSOフレンズ」は、まだ数多くいらっしゃいます。今後も本冊子を通じて、地域に関わる多様な人々の姿をお届けしてまいりたいと考えております。本冊子が、「地元の方々」「移住者」、そして「SOSOフレンズ」の皆さまがつながり、新しい交流や取り組みが生まれるきっかけになれば幸いです。



公益社団法人  
福島相双復興推進機構

## SOSOフレンズ 2026年3月31日発行

統括・発行 SOSOフレンズ編集部(公益社団法人福島相双復興推進機構)

企画・編集・ディレクション 株式会社スマイルズ(吉田 剛成/永井 史威/佐々木 航大/安達 茉莉)

デザイン 藤本 敏行(藤本制作室)

執筆 名和 実咲/佐々木 航大(株式会社スマイルズ)

撮影 安達 英莉/名和 実咲/Suzuki Jouji

イラスト むらかみ ゆか/黒田 悠(株式会社スマイルズ)/marutt Inc.

漫画 百瀬 ガンジィ

印刷 株式会社日進堂印刷所

スペシャルサンクス SOSOフレンズのみなさま

### お問い合わせ先

公益社団法人 福島相双復興推進機構(福島相双復興官民合同チーム)

広域まちづくりグループ まちづくり交流推進課

〒960-8031 福島県福島市栄町6-6 福島セントランドビル4階

☎ 024-502-1117 受付 9:00~17:00(土日祝日・年末年始除く)

SOSOフレンズと関わりたい方から  
ご連絡お待ちしております



URL: <https://www.fsrt.jp/>  
メールアドレス: [koryu\\_soso@fsr.or.jp](mailto:koryu_soso@fsr.or.jp)



SOSO  
レンズ

ソササコレンズ 創刊号

SOSO! Go find it!



大熊町のロボット芝刈り機

発行元:



公益社団法人  
福島相双復興推進機構